

藤屋重三郎とガイドゆかりの寺社・江戸文化巡り ～浅草・吉原・上野編～(解説版)

①浅草寺(金龍山浅草寺)

基本情報

- ・ 創建:628年(推古天皇36年)※東京都内最古の寺院
- ・ 宗派:聖観音宗(天台宗系単立)
- ・ 本尊:聖観世音菩薩(浅草観音)

628年頃、隅田川のほとりに住む檜前浜成(ひのくまはまなり)・竹成(たけなり)兄弟が漁をしている最中、投網の中に一体の仏像を発見した。この尊像を持ち帰ったところ、土師真中知(はじのまなかち)という土地の長が「聖観世音菩薩」の尊像であることを見抜いた。土師真中知は「御名を称えて一心に願い事をすれば、必ず功德をお授けくださる仏さまである」と浜成・竹成兄弟や近隣の人々に語り聞かせ、やがて私宅を寺に改めて観音さまの礼拝供養に生涯を捧げた。

見どころ 大提灯や仲見世通り、五重塔など、江戸情緒が色濃く残る観光名所。

徳川家康は500石寄進(=大國魂神社) ex)神田明神、氷川神社は300石

安養寺の観音堂は、当寺の「聖観世音菩薩」の御分体をお祀り

②浅草神社

基本情報

- ・ 創建:平安末期～鎌倉初期頃
- ・ 祭神:土師真中知命、檜前浜成命、檜前浜成命

土師氏の子孫が聖観世音菩薩の託宣を受け、祭神三氏の末孫が三人を郷土神として祀る三杜権現社として創建された。

見どころ 浅草寺本堂すぐ横に位置し、三杜祭で知られる神社。

江戸と信仰の関係を感じられる静かな空間。



【浅草寺本堂】



【浅草神社拝殿】



【浅草寺二天門】

二天門

現在の門は慶安2年(1649年)に浅草寺の東門として創建された。当初は隨身門と呼ばれ、豊岩間戸命、櫛岩間戸命を守護神像(隨身像)として左右に祀っていた。

明治17年(1884年)の神仏分離により、隨身像は浅草神社に遷座され、鎌倉の鶴岡八幡宮から広目天と持国天の像が奉納された。このとき隨身門から二天門へと名称を改めた。

二天の像は昭和20年(1945年)に修理先で戦災にあって惜しくも焼失したが、現在の持国・増長の二天像は、昭和32年(1957年)に上野・寛永寺の蔵有院(徳川家綱霊廟)から拝領した像である(門に向かって右が持国天、左が増長天)。

二天門は境内に残る江戸時代初期の古建築として貴重であり、国の重要文化財に指定されている。平成22年(2010年)に改修を終え、創建当初の鮮やかな姿によみがえった。

③べらぼう江戸たいとう大河ドラマ館

大河ドラマ「べらぼう」に関連した展示や江戸の町人文化を紹介。衣装や舞台セットの展示など、歴史とテレビ文化が融合した施設。

【昼食】館内レストラン「上野精養軒」で洋食ランチ(明治創業の老舗の味を堪能)

おすすめ:ハヤシライス・ビーフカレー(1,250円)、日替わりランチ(1,300円)

URL: <https://www.seiyoken.co.jp/restaurant/asakusa/cuisine.html>

④見返り柳・耕書堂跡(五十間道)・吉原大門跡

かつての遊廓の正門跡。吉原遊廓の歴史に触れながら、江戸時代の都市と風俗文化を考えるスポット。



【見返り柳】

見返り柳

【五十間道耕書堂跡】

【吉原大門跡】

吉原への出入り口となる日本堤には柳の木が植えられており、遊郭帰りの客が、名残惜しげに振り返る様子から、この名がついたと伝わっている。かつては山谷堀脇の土手にあったが、震災や戦災等で数代にわたり植え替えられ、現在は「吉原大門」交差点付近に植えられている。

「きめぎめのうしろ髪ひく柳かな」 この柳を詠んだ川柳も多い。

台東区教育委員会によると、柳を植えたのは、京都の島原遊郭の門口の柳をまねたとされている。

五十間道と耕書堂跡

日本堤から見返り柳から吉原大門へと続くS字に曲がった通いが「五十間道」。S字カーブを描いていることにより日本堤から吉原の様子が見えないように工夫されていた。鳶屋重三郎は20代でこの「五十間道」に書店「耕書堂」を開業、その才覚を開化させた。

吉原大門跡

五十間道を通ると、吉原遊郭唯一の出入り口である大門跡にたどり着く。五十間道がカーブを描いているため、大門の前まで行かないと、吉原遊郭の様子はうかがえない。絵は、歌川国貞の「北廓月の夜桜」。日本堤という長い田んぼ道を通して、ようやく目にした大門の先はまるで別世界のにぎわいです。治安の維持と女性の出入りを厳しく監視する為、大門の先には番所が設けられていた。門は火災等により何度も建替えられたが、関東大震災を最後に再建されることはなく、現在では大門も柱を模した「よし原大門」と書かれた街頭がたつ。

吉原遊廓の起源と沿革

1617年、商人・庄司甚右衛門(または庄司甚右兵衛)が幕府に遊郭の設置を許可され、日本橋葺屋町(現在の日本橋人形町周辺)に、幕府公認の遊郭として誕生したのが始まり。これが「元吉原」となります。元々遊郭があった場所が葦(よし)の生い茂る湿地帯だったため、「葦原」と名付けられたことが由来とされます。

市街地化が進んだことと、1657年の明暦の大火を機に浅草へ移転しました。この移転後の遊郭を「新吉原」と呼び、一般的に吉原といえば新吉原を指します。武士の統制や治安維持

のため、市中に散在していた売春宿を集約する形で開設され、後に引き手茶屋が中心となるなどシステムが変化しながら、1958年の売春防止法施行まで続きました。

新吉原&元吉原の規模

新吉原 約2万坪(東京ドーム2個分:幅335m、奥行225m)、最盛期には3000人超在籍

元吉原 明確な記録はないが、2丁四方(約220m×220m)との記述あり

⑤江戸新吉原耕書堂

鳶屋重三郎が開業した「耕書堂」を模した「江戸新吉原耕書堂」期間限定でオープン。江戸文化に関する書籍・資料を集めた書店。珍しい古書や資料展示もあり、歴史ファン必見のスポット。

⑥吉原神社

基本情報

- ・ 創建:明治14年(1881年)※5つの稲荷社を合祀
- ・ 祭神:倉稻魂命、市杵嶋姫命

「新吉原」には廓の守護神として5つの稲荷社が存在していた。吉原の入口である大門の手前に「吉徳稲荷社」、廓内の四隅に「榎本稲荷社」「明石稲荷社」「開運稲荷社」「九郎助稲荷社」

明治14年にこれら5つの稲荷社が合祀され、総称して吉原神社と命名された。

吉原の守護神として芸能、縁結び、火除けのご利益がある。小さいながらも歴史ある神社。

その後近隣の吉原弁財天も合祀され計6つの神社が祀られている。



九郎助神社

吉原遊郭内の四隅に祀られていた稲荷社のうち、最南端にあったのが九郎助神社
縁結び・五穀豊穰・諸願成就の神さまとして篤い信仰を集めていた。

⑦鷲神社

基本情報

- ・ 創建:不詳
- ・ 祭神:天日鷲神(アメノヒワシノカミ)、日本武尊



社伝によると、天照大御神が天之岩戸にお隠れになった際、天宇受売命が岩戸の前で舞われ、弦という楽器を司った神様があられた。天手力男命が天之岩戸をお開きになった時、その弦の先に鷲がとまったため、神々は世を明るくする瑞象を現した鳥だとお喜びになり、以後この神様は鷲大明神、天日鷲命と称されるようになった。

後に日本武尊が東夷征討の際、当社に立ち寄って戦勝を祈願し、志を遂げての帰途、社前の松に武具の「熊手」をかけて勝ち戦を祝い、お礼参いをされた。その日が11月酉の日であったため、この日を鷲神社例祭日と定めたのが酉の祭「酉の市」の始まりである。

商売繁盛の神様として崇敬され、毎年11月の酉の市で有名。

大國魂神社の大鷲神社と並ぶ関東三大西の市の一つ。熊手のお守りや江戸の祭礼文化に触れることができる。

⑧上野寛永寺(東叡山寛永寺)

基本情報

- ・ 創建:寛永2年(1625年)※慈眼大師天海大僧正によって建立
- ・ 宗派:天台宗大本山
- ・ 本尊:薬師瑠璃光如来(秘仏)



寛永2年(1625年)、徳川幕府の安泰と万民の平安を祈願するため、江戸城の鬼門(東北)にあたる上野の台地に、慈眼大師天海大僧正によって建立された。

後に第4代将軍・徳川家綱公の霊廟が造営され、将軍家の菩提寺も兼ねるようになった。東叡山主を皇室から迎えた(輪王寺宮)ことで、江戸時代には格式と規模において我が国随一の大寺院となった。

しかし幕末の上野戦争により敷地の大部分が上野公園となり、関東大震災や太平洋戦争の被害もあったが、戦後は新たに霊園を造営し、一般の檀家を受け入れるなど、開かれた寺としての役割を果たしている。

現在の伽藍は縮小されているが、旧寛永寺五重塔(上野動物園内)など歴史的建造物が残る。

多摩地区最初の絵師(**関良雪**)が寛永寺の絵師として活躍した。

根本中堂

寛永寺の本堂にあたり、天台宗の大本山である比叡山延暦寺の根本中堂を模して建立された建物

江戸幕府三代将軍・徳川家光が、祖父家康の遺志を継ぎ、1625年(寛永2年)に創建

本尊は薬師如来で、東叡山寛永寺の総本尊として祀られた

江戸城の鬼門(北東)を守護するため、上野の山に寛永寺が建立され、その中心がこの根本中堂
江戸時代、寛永寺は江戸最大級の寺院で、比叡山延暦寺を「西の総本山」とすれば、寛永寺は「東の総本山」として機能 大伽藍は「東叡山」と呼ばれ、根本中堂を中心に塔や堂宇が立ち並び、京都に匹敵する規模を誇っていた

1868年(慶応4年/明治元年)の上野戦争(彰義隊の戦い)で、寛永寺の主要伽藍は焼失

根本中堂もその戦火で焼け落ち、往時の姿は失われてしまいました。

現在の根本中堂は、かつて川越喜多院の本堂だった建物を移築したものです。1879年(明治12年)、寛永寺本堂として移されました。したがって、寛永寺根本中堂は創建当初の姿ではなく、喜多院本堂を移築した再建堂となっています。現在も本尊の薬師如来を安置し、天台宗の儀礼や法要が行われています。堂内には徳川家の位牌やゆかいの品も祀られ、江戸幕府と深い関わりをしのぶことができます。

比叡山延暦寺の根本中堂と同じように、「不断念仏」が続けられており、東叡山の伝統を今に伝えていきます。

上野大仏

寛永8年(1631)、越後村上藩主・堀直寄が、江戸の庶民救済を願い、寛永寺子院・正法院に釈迦如来坐像を建立したことに始まる。当初の像は銅造で、高さ約6メートルの中規模な大仏であり、江戸の町人にも親しまれる存在であった。建立後の江戸期において、大仏はたびたび自然災害の被害を受けた。(1647年(正保4年):地震により倒壊、1841年(天保12年):火災により損傷)しかし、そのたびに修復がなされ、江戸庶民の信仰の対象として存続した。このことは、江戸の都市

生活において大仏が宗教的・精神的な拠り所であったことを示している。

大正 12 年(1923)の関東大震災は、大仏に決定的な打撃を与えた。強い揺れにより大仏の首が落下し、像は大きく損なわれた。その後、修復を試みる動きもあったが、時代はすでに戦争に向かう社会状況にあり、十分な再建は果たされなかった。

太平洋戦争の戦時体制下では、金属資源不足のため各地の仏像や梵鐘が供出された。上野大仏も例外ではなく、胴体部分や体の大部分が供出され、結果として大仏は「顔」だけが残されることとなった。

戦後の混乱期を経て、昭和 47 年(1972)に残された大仏の「顔」が上野公園内の大仏山にレリーフとして安置された。以降、現在に至るまで「上野大仏」として祀られており、特に「これ以上落ちない大仏」として受験生の合格祈願スポットとして広く知られるようになった。

⑨上野東照宮

基本情報

- ・ 創建:寛永 4 年(1627 年)
- ・ 祭神:徳川家康、徳川吉宗、徳川慶喜



1616 年(元和 2 年)2 月 4 日、天海僧正と藤堂高虎は危篤の徳川家康公の枕元に呼ばれ、「三人一つ処に末永く魂鎮まるところを作って欲しい」と遺言された。

天海僧正は藤堂高虎らの屋敷地であった現在の上野公園の土地を拝領し、東叡山寛永寺を開山。

1627 年(寛永 4 年)に境内の一つとして創建した神社「東照社」が上野東照宮の始まりである。

1646 年(正保 3 年)には朝廷より正式に宮号を授けられ「東照宮」となった。

現存する金色殿や透堀、唐門は 1651 年(慶安 4 年)に 3 代将軍・徳川家光公が造営替えをしたもので、遠く日光までお参りに行くことができない江戸の人々のために、日光東照宮に準じた豪華な金色殿を建立した。この造営替えに際し、全国の大名家から競うように約 250 基の灯籠が奉納された。

桃山様式の華麗な装飾が特徴の金色殿などの豪華な建造物。戦争や地震にも崩壊を免れた貴重な江戸初期の建築として国の重要文化財に指定されており、国内外から多くの参拝者が訪れる。

⑩蜀山人の碑(上野恩賜公園内)

狂歌師・蜀山人を記念する石碑。江戸文化を代表する文人の記録として、上野公園内に静かに佇んでいる。蜀山人は、蔦屋重三郎と交流が深く、狂歌や黄表紙、洒落本と多彩なジャンルで活躍した幕臣・太田南畝の別号。狂歌師としては、「四方赤良」で、江戸の三大狂歌師の 1 人と謂われた。碑には寛永寺の総門であった黒門と桜を詠んだ蜀山人の歌「一めんの花は碁盤の上野山 黒門前にかかるしら雲」が刻まれている。

蜀山人は、高井戸～仙川～国分寺～**府中**のルートで 1 泊 2 日の小旅行を行い、その記録を「三餐餘興」(漢詩の書)に残した。「**四人部屋**」を営む**野村瓜州(六郎右衛門)**と親交があり、**瓜州**が案内した玉川(多摩川)の夕照(夕景)に感動し、その風景を「三餐餘興」巻末の挿絵とした。

(参考文献:ブックレット 1「府中宿」より)



【太田南畝(蜀山人)】



【蜀山人の碑】

